

## 若手の会

慶應義塾大学医学部生理 小泉 周

1997年より始まった日本生理学会若手の会の活動も、この9月で5周年を迎えました。これまで多くの先生方に、叱咤激励をいただきながら、活動を続けていくことができました。厚く御礼申し上げます。今後ともどうぞよろしく願いいたします。

この記事についてのご質問やご意見については、小泉までメールをいただければ幸いです(amana@bigfoot.com)。

### <若手研究者の現状と若手の会の活動>

若手研究者、とくに大学院生などの学生は、自分の所属している「学会」を、普段それほど意識してはいない。むしろ、いま自分の行っている研究に軸足をおきつつも、その範疇にとどまらず、自分の学問的興味と将来の研究の方向性を広げる道を模索している。たとえば、生理学会に所属する若手だからといって生理学会大会に参加するばかりでなく、他学会の学会大会やサマースクールなどに広く参加し見聞を広めている。また逆に、他学会の若手研究者も生理学会に興味をもち、生理学会への参加を希望している者もいるのが現状である。このように、若手研究者は、研究者として物心ついたときから、より学際的、国際的な交流を求めようになる。ただ、実際には、多くの若手研究者は自分自身ではその手段と方法を持っておらず、厳しい現実の中で日々の研究生活をもがいているというのが現状である。

若手の会は、学問的には生理学に基軸をおきつつも、若手研究者の学際的・国際的な感覚を集約し、それを大切に育み、実際にそうした交流の場を提供することをその第1の目的としている。

具体的な活動としては、生理学会大会期間中における「若手の会シンポジウム」の開催、夏季の大学施設の夏休みを利用した「生理学サマースクール」の開催、そして、若手研究者の互いの学問的交流を促す「生理学若手勉強会(合宿)」を行

ってきた。こうした若手の会の活動は、決して子供の「お遊び」ではなく、あくまでもアカデミックな志向性をもったものとして行われている。

国際的な活動という点では、2009年の国際生理学会(IUPS)京都大会に向けて、若手の会としてもより国際的な交流を目指す方向を模索していけたらと思っている。

ポスト・ゲノムが叫ばれてはや数年が経過した。若手研究者の志向が、「モノ」から「機能」を重視する方向に向かっていることは間違いない。こうした志向性を生理学会としても敏感に察知しつつ、学会運営や大会運営に生かしていくことを希望している。

### <2002年度活動計画>

第3期の活動として、5名の世話人メンバー(奥村 哲, 徳永 太, 松田哲也, 安松信明, 小泉 周)を中心として、活動を進めている。下記3項目(+1項目)につき、イベントごとに担当者がイニシアチブをとり活動を進めていく。同時に、東京以外のメンバーの参加を促し、中心となるメンバーの構成を大学院生や学生に移し、若手研究者の志向にあったフレキシブルな活動を行っていく。

#### (1) 日本生理学会大会：若手の会シンポジウム

2003年3月の福岡での生理学会大会において「科学とは何か—Caイメージングを例にとって—(仮)」というタイトルでのシンポジウムを開催する。日々の研究生活の中で目先の結果を求めるあまり見失われがちな「科学」の本質とそれを探求するマインドについて、先輩となる第一人者の先生方より具体的な例をあげつつアドバイスをいただく。

2002年3月の広島での生理学会大会においても「科学とは何か」というテーマでシンポジウムを開催した。榎木英介(神戸大学医学部医学科)、

岡野ジェイムス洋尚（慶應義塾大学医学部生理学教室）、定藤規弘（岡崎国立共同研究機構生理学研究所大脳皮質機能研究系）、八尾 寛（東北大学大学院生命科学研究科）諸先生にご講演をいただき、「科学的な」研究マインドについて、それぞれの立場やバックグラウンドから具体的な例を挙げつつディスカッションを行うことが出来た。

## (2) 生理学若手サマースクール

2002年8月に第2回サマースクールを開催した。第2回サマースクールは、「一脳神経活動の計測技術・解析法一視覚情報処理システムの理解をめざして」をテーマとし、第1線で活躍する10名の先生に持ち時間2時間でご講義いただいた（表1を参照：サマースクールの詳細については、ホームページを参照してください <http://www.soc.nii.ac.jp/psj/young/summer.html>）。また、サテライトシンポジウムとして、フラクタル研究で有名な理論物理学者の高安秀樹（SONY CSL）・美佐子（公立はこだて未来大学）両先生にご講演いただいた。参加者は、大学生から教授までの幅広い年齢層にまたがる70人超であった。その大半が、現在生理学会会員ではなかったことも付記しておく。このように、テーマ、講師、参加者の構成をみても、サマースクールを通じて学際的な交流が深まったことがよく分かっていただけたと思う。

現在、2003年夏にも同様の生理学若手サマースクールを企画計画している。2003年夏のサマースクールについてご意見ご希望などありましたら、担当の松田（[matsuda.psync@tokyo.email.ne.jp](mailto:matsuda.psync@tokyo.email.ne.jp)）までご連絡ください。

## (3) 若手勉強会（合宿）

若手研究者が互いの研究内容を紹介しあい、交

流を深めることを目的として、若手勉強会を企画している。第1回は、広島での2002年3月の学会大会の後に、曾我部正博教授（名古屋大学医学部第2生理学教室）をお迎えして、15人ほどで1泊2日の日程で泊まりこみを行い、互いの研究の紹介を行い交流を深めた。2002年8月の生理学若手サマースクールの際にも前日に勉強会ということで、互いの研究の紹介を行った。内容は生理学に限らず、モノから機能まで、幅広い研究分野を対象としてディスカッションを行うことが出来た。

## (4) 高校生（および、大学生、一般）むけシンポジウム

高校生や一般の大学生に対する啓蒙的なシンポジウムのようなものも生理学会（教育委員会や将来計画委員会）とともに企画運営していけたらと思っている。

若手の会としては、2002年3月の広島での生理学会大会の際に「高校生セミナー」を行った。高木 都先生（奈良県立医科大学第二生理学教室）、渋谷まさと先生（昭和大学医学部第二生理学教室）、重川宗一先生（国立循環器病センター研究所循環分子生理部）、石川義弘先生（横浜市立大学医学部第一生理学教室）に「あなたにとってかけがえのない心臓についてもっと迫ろう！」というタイトルで高校生にも分かりやすくお話しをしていただいた。残念ながら春休み中ということもあり、参加者数は20名余と予想より少なかったが、参加した高校生の熱意と期待は大きく、講師との間で熱い議論がかわされた。

実際には、若手の会単独で、こうした高校生や一般むけのセミナーを行うには、資金や広報といった面で無理のある部分が多い。今後の活動としては、生理学会の委員会を中心とした企画運営を行っていただくことをお願いしたい。

表1：第2回サマースクール実施内容

タイトル：脳神経活動の計測技術・解析法  
視覚情報処理システムの理解をめざして

2002年8月5日から7日 慶應義塾大学医学部  
にて開催した。

講演（敬称略）

第1日目

「NEURONシミュレータを用いた網膜視覚情報  
処理機能の解析」

小泉 周（慶應義塾大学医学部生理学教室）

「平面型マルチ電極の網膜への適用」

石金 浩史（東京大学大学院人文社会系研究科  
心理学研究室）

「外側膝状体と一次視覚野の情報処理」

佐藤 宏道（大阪大学健康体育部・大学院生命  
機能研究科）

「サルMT・MST野：視覚運動情報処理と立体  
視」

永福 智志（富山医科薬科大学医学部第二生理  
学）

第2日目

「頭頂連合野における視覚情報処理」

泰羅 雅登（日本大学医学部第一生理学教室）  
「側頭葉視覚連合野における情報処理と機能構築」  
藤田 一郎（大阪大学大学院生命機能研究科）  
「視線運動制御と前頭葉視覚領域」  
福島 菊郎（北海道大学大学院医学研究科認知  
行動学分野）

第3日目

「半側空間無視—ヒトの右大脳半球損傷による方  
向性注意障害—」

石合 純夫（東京都神経科学総合研究所リハビリ  
テーション研究部門）

「行動決定と前頭連合野」

坂上 雅道（玉川大学学術研究所脳科学研究施  
設）

「精神神経疾患の眼球運動」

松浦 雅人（日本大学医学部精神神経科学教室）

サテライトシンポジウム（2日目）

「生命科学と理論物理学との対話 —ゆらぎの科  
学—」

「フラクタル・カオス・相転移の基礎」

高安 秀樹（SONY CSL）

「臨界ゆらぎの数理」

高安美佐子（公立はこだて未来大学）